厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）
分担研究報告書

高齢者の多面的社会参加が幸福感に及ぼすインパクトに関する研究

分担研究者　　西下　彰俊　　金城学院大学現代文化学部教授

研究要旨

都市部の高齢者の社会参加のレベルを規定する要因を調査データを用いて実証的に明らかにすることが本研究課題全体の研究目的である。そのもとで、分担研究者としての筆者の研究目的は２つある。１つは、高齢者の基本属性と高齢者の社会参加のレベルの関連性を調べることであり、もうひとつは高齢者の多面的な社会参加の状況と高齢者の心理的な適応状態を測定する重要な変数の１つである幸福感の関連性を調べることである。

分析検討の結果、知見として得られたことは以下の６点である。まず第１に、子どもとの同居は高齢者の幸福感に大きな影響を及ぼす。既婚子との同居は幸福感を高め、逆に未婚子との同居は幸福感を低下させる。第２に、予め用意した 34 の社会参加活動のうち、本研究では、近所づきあい、地域の行事への参加、町内会・自治会の活動、社会奉仕（ボランティア活動）、シルバー人材センターなどの活動の５活動を取り上げ、幸福感との関連を見た結果、いずれも有意な関連が示された。第３に、社会参加活動のきっかけを７つ想定し、複数回答で質問したところ、「個人の意志で」(44.4%)、「友人・仲間のすすめ」(43.0%)が上位を占めた。行政政策上重要な「区の広報」(23.4%)、「自治会等の呼びかけ」(24.6%)は比較的低率にとどまった。

第４に、サンプル全体の幸福感を規定する要因を重回帰分析した結果、基本属性要因としては、性、年齢、健康度自己評価、配偶者の有無、同居既婚子の有無の５変数が 0.1%あるいは 1%水準で、社会参加要因としては、生きがいの有無、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無の５変数が 0.1%、1%あるいは 5%水準で幸福感に有意な規定力を示した。

第５に、サンプルを性別に分け男性サンプルについて、幸福感を規定する要因を重回帰分析した結果、基本属性要因としては、年齢、健康度自己評価、配偶者の有無、同居既婚子の有無の５変数が 0.1%あるいは 1%水準で、社会参加要因としては、生きがいの有無、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無の５変数が 0.1%あるいは 1%水準で幸福感に有意な規定力を示した。第６に、女性サンプルについて、幸福感を規定する要因を重回帰分析した結果、基本属性要因としては、健康度自己評価のみ１変数が 0.1%水準で、社会参加要因としては、生きがいの有無、趣味の有無の２変数が 0.1%あるいは 5%水準で幸福感に有意な規定力を示した。男性と女性では幸福感にインパクトを与える変数が著しく異なることが明らかになった。

A．研究目的

日本社会の高齢化の進行とともに、高齢者の社会参加の問題は、高齢者の生きがいとの関連において、大きな行政課題のひとつとなっている。しかしながら、国が実施してきた高齢者の社会参加、地域参加に関する行政調査を除けば、本格的な高齢者の社会参加に関する実証的な調査研究はほとんど行われていないのが現状である。とりわけ、高齢者の社会参加を促進する要因、阻害する要因を経年的に詳細に調査研究する研究計画という意味では、本研究が初めてである。

分担研究者としての本研究における目的は、厚生労働科学研究費の補助により2003年1月に東京都足立区で実施された「高齢者の社会参加に関するアンケート調査」のデータを用いて、都市部高齢者の社会参加行動の状況と幸福感の関連性を統計的に明らかにすることである。

B．研究方法

「高齢者の社会参加に関するアンケート調査」のデータの有効回答1,924サンプルについて、社会参加行動の状況と幸福感の関連性を調べるために、より具体的には、高齢者の基本属性と幸福感の関連性を調べることおよび高齢者の社会参加の程度と幸福感の関連性を調べるために、クロス集計（およびχ^2検定）および一元配置の分散分析の方法を用いて分析考察を行った。

C．研究結果

（1）基本属性と幸福感の関連について

ここでは、性、年齢階層、職業の有無、既婚子との同居、未婚子との同居を説明変数とし、被説明変数である幸福感との関連を見る。幸福感は、「幸せである」、「やや幸せである」、「他の人と同じ」、「あまり幸せでない」、「幸せでない」の5つの選択肢で質問している。幸福感の度数は、幸せであるという回答が35.6%（673名）、やや幸せであるという回答が33.4%（631名）、他の人と同じが21.5%（406名）、あまり幸せでないが7.3%（138名）、幸せでないが2.2%（42名）という分布を示した。「幸せである」と「やや幸せである」の合計を性別に見ると、男性は66.9%（831名）、女性は73.1%（473名）であった。これを内閣府（旧総務庁）が5年に1度実施している『老人の生活と意識に関する比較調査』データと比較してみよう。1995年に実施された同調査では、全く同じ質問文で幸福感を質問している（本調査の方が先行研究の調査データと比較するために、全く同じ質問文で幸福感を質問したのである）。幸福感について、「幸せである」と「やや幸せである」の合計を性別に見ると、『老人の生活と意識に関する比較調査』では、男性71.0%、女性72.7%であった。足立区の高齢者の場合、男性は4.1ポイント低く、逆に女性は0.4ポイント高いという結果である。調査時期が異なるので、厳密な比較は困難であるが、足立区の男性高齢者の幸福感は、日本全国の男性高齢者の幸福感に比べてやや低いことが確認できる。

以下クロス表と分散分析表から関連性について確認する。まず、クロス集計に関しては「あまり幸せでない」と「幸せでない」が比較的少数なので選択肢を合体させた。そのため、以下の各表の表頭は4つのカテゴリからなる。分散分析に関しては「幸せである」を5点、「やや幸せである」を4点、「他

の人と同じ」を３点、「あまり幸せでない」を２点、「幸せでない」を１点とし、幸福感の高低を点数化した。

まず、性については、統計的に有意な関連は見られなかった。年齢階層と職業の有無の両変数についても幸福感との統計的に有意な関連は見られなかった。

基本属性にかかわる変数で幸福感と有意な関連を示したのが、子どもとの同居である。しかし、その子どもが既婚か未婚かによって幸福感に及ぼすインパクトが異なることが判明した。すなわち、既婚子との同居の有無のみが、幸福感との間に統計的に有意な関連を示した。既婚子との同居は、表１、表２－A、図１が示すように、0.1%水準で統計的に有意な関連を示している。具体的には、表１から、既婚子との同居サンプル（以下、既婚子同居群と略す）では、幸せであるが 50.4%と最も多いのに対し、既婚子と同居していないサンプル（以下、既婚子別居群と略す）では、幸せであるが 33.0％にとどまっており、やや幸せの 34.6%に次いでいる。「あまり幸せでない」と「幸せでない」を合体させたカテゴリは既婚子同居群では 23.1%であるのに対し、既婚子別居群では 32.4%と３分の１弱存在する。既婚子との同居の有無と幸福感の程度は、0.1%水準で統計的に有意な差が見られる（χ^2値＝31.86）。

また、表２－A、図１から分かるように、サンプル全体の 10%強を占める既婚子同居群は、幸福感の平均値が 4.21（標準偏差 0.94）ときわめて高いのに対し、既婚子別居群の幸福感は、3.88（標準偏差 1.03）と低い。表２－B の一元配置の分散分析の結果、0.1%水準で統計的に有意な差が確認できた（F 値=24.19）。既婚子と同居することは高齢者の幸福感を高める方向に作用すると言える。

一方、未婚子との同居は、同じく幸福感と相関があるものの、作用の方向は全く逆である。すなわち、表４－A と図２の一元配置の分散分析が示すように、未婚子と同居している群は、幸福感の平均値が 3.86（標準偏差 1.02）と低く、未婚子と同居していない群の幸福感も、3.96（標準偏差 1.02）と低い。5%水準においても統計的に有意な差は確認できない。

以上のことから、既婚子同居は、高齢者である自分たちが将来経済的に扶養してもらえる立場になる可能性が高く経済的な不安なく安心して暮らせる可能性が高いこと、また自分たちが介護を必要とする状態になった時に、在宅で介護を受けられる可能性が高いことの２つの理由から、幸福感を高める方向に働く。他方、民法上の生活保持義務のある未婚子との同居は、未婚子を経済的に扶養する責任が重くのしかかるために幸福感を低下させる方向に若干働くものの統計的に有意な差が生じるほどの影響は確認できないと結論づけることができる。

（２）社会参加の諸側面と幸福感の関連について

本調査では、社会参加の多様な側面についてそれぞれの機能を測定するために、34 の具体的な社会的活動を示し、活動の有無、活動の頻度を質問している。本報告では、このうち「近所づきあい」、「地域の行事への参加」、「町内会・自治会の活動」、「ボランティア活動」、「シルバー人材センターなどの活動」の 5 つの活動について、幸福感と

の関連を分析する。

まず、近所づきあいについて。表５が示すように、0.1%水準で統計的に有意な差が見られ、近所づきあいが活発であるほど幸福感が高いのに対し、近所づきあいをしていないほど幸福感が低い。特に、近所づきあいを全くしていない層（88 名）は、３割弱があまり幸せでないあるいは幸せでないと回答している。表６－A、図３から分かるように、一元配置の分散分析の結果、0.1%水準で統計的に有意な差が確認できた(F 値=53.91)。この図から、近所づきあいを全くしていない場合には、著しく幸福感が低いことが明らかとなる。表６－A から分かるように、近所づきあいを全くしていない層の幸福感の平均値は 3.16 ときわめて低い。高齢者政策的視点からも、地域保健の観点からも、こうしたいわゆる閉じこもりの層への緩やかな介入が検討されてしかるべきである。本研究の調査デザインには、こうした層に焦点を当てることが含まれている。

第２に、地域の行事への参加について。表７から分かるように、いつもしている高齢者ほど幸福感が高いのに対し、行事に参加していないほど幸福感が低い。0.1%水準で統計的に有意な差が見られる（χ^2値＝166.13)。表８－A、表８－B、図４から分かるように、一元配置の分散分析の結果、0.1%水準で統計的に有意な差が確認できた（F 値=51.77)。地域の行事に全く参加していないサンプル 542 名は、3.51 と著しく幸福感の平均値が低いことがこの図から明らかである。ただし、地域の行事に全く参加していないサンプルの幸福感は、先の近所づきあいを全くしていないサンプルほど低くはない。近所づきあいの方が、地域行事への参加よりも、幸福感に及ぼすインパクトが強いと言える。

第３に、町内会・自治会の活動について。表９から分かるように、いつも活動している対象者ほど幸福感が高いのに対し、活動していないほど幸福感が低い（χ^2値＝90.46)。0.1%水準で統計的に有意な差が見られる。表１０－B、図５から分かるように、一元配置の分散分析の結果、0.1%水準で統計的に有意な差が確認できた(F 値=25.94)。町内会・自治会の活動に全く参加していないサンプル（515 名）は、3.67 と著しく幸福感の平均値が低いことがこの図から分かる。ただし、近所づきあいを全くしていない層の幸福感の平均値 3.16 や地域の行事に全く参加していないサンプルの幸福感の平均値 3.51 よりは高い。

第４に、ボランティア活動（社会奉仕活動）について。表１１から分かるように、いつも活動している対象者ほど幸福感が高いのに対し、活動していないほど幸福感が低い。0.1%水準で統計的に有意な差が見られる（χ^2値＝90.48)。表１２－B、図６から分かるように、一元配置の分散分析の結果、0.1%水準で統計的に有意な差が確認できた（F 値=28.92)。ボランティア活動（社会奉仕活動）を全くしていない 876 名（全サンプル 1924 名の半数弱）の幸福感の平均値は、3.70 と著しく低い。

最後に、シルバー人材センターなどの活動について。表１３から分かるように、いつも活動している対象者ほど幸福感が高いのに対し、あまり活動していないあるいは全く活動していないほど幸福感が低い。これは、0.1%水準で統計的に有意な差が見られる（χ^2値＝48.67)。表１４－B、図７か

ら分かるように、一元配置の分散分析の結果、0.1%水準で統計的に有意な差が確認できた（F 値=11.88）。シルバー人材センターなどの活動については、今後さらなる検討が必要である。というのも、すでに（1）の基本属性のところで仕事の有無と幸福感の関連を調べた結果、相関がないことが確認されているからである。シルバー人材センターなどの活動が有意な関連を示し、仕事の有無という変数では関連を示さなかったことから、今後さらに詳細に分析することが不可欠である。具体的には、シルバー人材センターの仕事、シルバー人材センター以外の仕事、仕事なしの３つのカテゴリに分けて分析する必要がある。

（３）社会参加のきっかけと幸福感の関係について

高齢者に対する行政施策に関して、高齢者の社会参加のきっかけを調べることはきわめて重要な政策課題である。本調査研究では、「友人・仲間のすすめ」「家族のすすめ」「区の広報」「活動団体の呼びかけ」、「新聞等の情報」、「自治会等の呼びかけ」、「個人の意志で」という７つのきっかけを想定した。また、「特にない」、「その他」という２つの選択肢も用意した。その他が 4.9%（58 名）名であったことから、高齢者の社会的活動については上記の７つの具体的なきっかけでほぼ網羅されていると見てよい。なお、特にないが 15.7%（187 名）あった。上記の７つの具体的なきっかけのいずれかに回答しているサンプルは 1327 名である。この数字を分母に、各きっかけの選択率を見たところ、以下のような結果になった（表略）。

まず７つのうちで最も多かったのは、「個人の意志で」の 44.4%(589 名)、以下、「友人・仲間のすすめ」の 43.0%（571 名）、「自治会等の呼びかけ」の 24.6%（326 名）、「区の広報」の 23.4%（310 名）、「家族のすすめ」の 10.6%（140 名）、「新聞等の情報」の 8.7%（116 名）、「活動団体の呼びかけ」の 8.4%（111 名）と続いている。性別に見ると、「友人のすすめ」「区の広報を見て」の 2 つでは、女性の方が多い。すなわち、「友人のすすめ」は、男性が 40.3%であるのに対し女性は 48.1%、「区の広報を見て」は、男性が 21.0%であるのに対し女性は 27.9%であった。他方男性の方が多いきっかけは、確認できなかった。なお、きっかけで最も多い「個人の意志で」は、男女どちらも 44.4%であり、性差は見られなかった。

（４）重回帰分析による検討

（1）から（3）までは、クロス集計と χ^2 検定の結果から、ある変数（要因）と幸福感の単純な関連性について様々な角度から検討してきた。

ここでは、基本属性モデル（モデル１）、社会参加要因モデル（モデル２）、基本属性および社会参加要因モデル（モデル３）の３つを設定し、各モデルごとにどのような要因が幸福感に統計的に有意な影響を及ぼしているのかを検討する。

なお、各モデルについて、60 歳以上のサンプル全体（若干名の 59 歳以下のサンプルは除く）、男性サンプルのみ、女性サンプルのみの３つの場合について上記の分析考察を行う。

(a) サンプル全体の場合

サンプル全体を対象に、モデル１では、性、年齢、健康度自己評価、仕事の有無、

配偶者の有無、同居未婚子の有無、同居既婚子の有無の７つの基本属性変数を投入し、重回帰分析を行った。表１５は、標準偏回帰係数（β）とその有意水準を示している。投入変数の数値化については、性は、男性＝０、女性＝１とし、仕事の有無、配偶者の有無、同居未婚子の有無、同居既婚子の有無の４変数については、あり＝１、なし＝０としている。健康度自己評価は４件法のデータを点数化し、年齢はデータをそのまま用いている。モデル１の式全体の F 値は 26.336 であり、0.1%水準で有意であった。

投入した７変数のうち、有意な規定力を示したのは、性、年齢、健康度自己評価の程度、配偶者の有無と同居既婚子の有無の５変数であった。表のβ値から、女性ほど、高齢であるほど、健康であると感じるほど、配偶者がいるほど、既婚子がいるほど幸福感が高いことが明らかとなった。とりわけ、標準偏回帰係数（β）の値から、健康度自己評価と性の規定力が大きい。性別はさておき、健康であると自己認識できることは幸福感の大きな源となる。先行研究では、社会参加の一つのあり方と位置づけられる仕事に関して、有職者の幸福感が高いことが知られているが、本サンプルの場合、多くの高齢者が仕事に従事しているため幸福感の高低に影響を及ぼすには至らなかった。

次にモデル２では、社会参加の各側面を示す６つの変数、すなわち、生きがいの有無、町内会・自治会活動の程度、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無を投入し、重回帰分析を行った。表１５のモデル２の欄がその結果である。モデル２の式全体の F 値は 72.658 であり、0.1%水準で有意であった。

投入変数の数値化については、生きがいの有無と趣味の有無は、有り＝１、無し＝０とし、町内会・自治会活動の程度、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度については、健康度自己評価の場合と同様に、４件法の回答をそのまま点数化した。

投入した６変数のうち、有意な規定力を示したのは、生きがいの有無、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無の５変数であった。

すなわち、生きがいがあるほど、ボランティア活動をよくやっている人ほど、近所づきあいをよくしているほど、友人を良く訪問しているほど、趣味がある人ほど幸福感が高いという結果である。

意外であるが、社会参加の重要な側面の一つである町内会・自治会活動の参加程度の程度は全く幸福感に影響しなかった。

最後にモデル３では、モデル１とモデル２で投入した変数をすべて投入した。すなわち、基本属性にかかわる変数７つ、社会参加に関連する変数６つの合計１３こを一括投入した。モデル３の式全体の F 値は 39.711 であり、0.1%水準で有意であった。

有意な規定力を示した変数は、モデル１、モデル２と全く同様であり、基本属性に関しては、性、年齢、健康度自己評価の程度、配偶者の有無と同居既婚子の有無の５変数が、社会参加要因に関しては生きがいの有無、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無の５変数であった。

（b）男性サンプルの場合

サンプル全体の重回帰分析の結果、表

１５が示すように、性による統計的有意差が確認された。そこで、男性サンプルと女性サンプルに分け、重回帰分析を行い統計的に有意な規定力を持つ変数を析出することを意図した。

表１６が男性サンプルに関する重回帰分析の結果をモデル１、モデル２、モデル３に分けて示したものである。

モデル１において、年齢、健康度自己評価、仕事の有無、配偶者の有無、同居未婚子の有無、同居既婚子の有無の６変数を投入した結果、式全体ではF＝22.442で0.1%水準で有意であった。投入した６変数のうち、年齢、健康度自己評価、配偶者の有無、同居既婚子の有無の４変数が 0.1%水準あるいは 5%水準で有意であった。すなわち、年齢が高いほど、健康であると自己認識しているほど、配偶者がいるほど、同居既婚子がいるほど男性の幸福感が高いという知見が得られた。

次に、モデル２において、社会参加の各側面を示す６つの変数、すなわち、生きがいの有無、町内会・自治会活動の程度、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無を投入し、重回帰分析を行った。表１６のモデル２の欄がその結果である。モデル２の式全体のF値は47.169であり、0.1%水準で有意であった。

投入した６変数のうち、有意な規定力を示したのは、生きがいの有無、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無の５変数であった。

すなわち、生きがいがあるほど、ボランティア活動をよくやっている人ほど、近所づきあいをよくしているほど、友人を良く訪問しているほど、趣味がある人ほど幸福感が高いという結果である。

意外であるが、社会参加の重要な側面の一つであるボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、町内会・自治会活動の参加程度の程度は男性サンプルについても、全く幸福感に影響しなかった。

最後にモデル３では、モデル１とモデル２で投入した変数をすべて投入した。すなわち、基本属性にかかわる変数６つ、社会参加に関連する変数６つの合計１２変数を一括投入した。モデル３の式全体のF値は29.898であり、0.1%水準で有意であった。

有意な規定力を示した変数は、モデル１、モデル２と全く同様であり、基本属性に関しては、年齢、健康度自己評価、配偶者の有無、同居既婚子の有無の４変数が、社会参加要因に関しては生きがいの有無、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無の５変数であった。

（ｃ）女性サンプルの場合

表１７が女性サンプルに関する重回帰分析の結果をモデル１、モデル２、モデル３に分けて示したものである。

モデル１において、年齢、健康度自己評価、仕事の有無、配偶者の有無、同居未婚子の有無、同居既婚子の有無の６変数を投入した結果、式全体ではF＝8.316で0.1%水準で有意であった。投入した６変数のうち、健康度自己評価、同居既婚子の有無の２変数が0.1%水準あるいは5%水準で有意であった。すなわち、健康であると自己認識しているほど、同居既婚子がいるほど女

性の幸福感が高いという知見が得られた。なお、男性サンプルで統計的に有意な影響を及ぼした年齢と配偶者の有無は全く幸福感との関連が見られなかった。

年齢はひとまず置くとして、「配偶者の有無」に関しては深い社会老年学的含意がある。つまり、男性である夫の幸福感は妻が存在することで高まるのに対し、逆に女性である妻の幸福感は、夫が存在することによる影響を全く受けないということである。本調査データから、「配偶者が幸福感に及ぼすインパクトの非相称性（asymmetry）」という知見が得られたと言える。

次に、モデル２において、社会参加の各側面を示す６つの変数、すなわち、生きがいの有無、町内会・自治会活動の程度、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無を投入し、重回帰分析を行った。表１７のモデル２の欄がその結果である。モデル２の式全体のＦ値は 27.017 であり、0.1%水準で有意であった。

投入した６変数のうち、有意な規定力を示したのは、生きがいの有無、趣味の有無の２変数のみであった。すなわち、生きがいがあるほど、趣味がある人ほど幸福感が高いという結果である。意外なことに、社会参加の重要な側面の一つであるボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度は女性サンプルの場合に、全く幸福感に影響しなかった。

最後にモデル３では、モデル１とモデル２で投入した変数をすべて投入した。すなわち、基本属性にかかわる６つの変数、社会参加に関連する６つの変数合計１２変数を一括投入した。モデル３の式全体のＦ値は 14.694 であり、0.1%水準で有意であった。

有意な規定力を示した変数は、基本属性に関しては、健康度自己評価のみの１変数が、社会参加要因に関しては生きがいの有無、趣味の有無の２変数のみであった。モデル１において、5%水準で統計的に優位な規定力を示した同居既婚子の有無は、モデル３において、規定力を失っている。重回帰分析の結果、女性サンプルの幸福感に影響するのは、健康であるという自己認識、生きがいを持っていること、趣味を持っていることの３要因のみであることが明らかとなった。おそらく、今回の女性サンプルが様々な点で同質性の高い高齢者の集団であるために、幸福感に影響を及ぼす変数が少なかったのではないかと考えられる。

D．考察

Ｃの（１）で示したように、既婚子との同居は高齢者の幸福感を高める。一方未婚子との同居は幸福感と相関関係にない。1924 サンプルの今回のデータに関して、配偶者の有無が幸福感に及ぼす影響については確認できなかったが、配偶者の有無が高齢者の幸福感に影響することが示された先行研究もある。この点は、今後の課題としなければならない。

Ｃの（２）で述べたように、34 の社会参加活動のうち、近所づきあい、地域の行事への参加、町内会・自治会の活動、社会奉仕（ボランティア活動）、シルバー人材センターなどの５つの活動を取り上げ幸福感との関連を見た結果、いずれも有意な関連が示された。この活動のうち、近所づきあいの程度が幸福感の高低に最も大きな影響を及ぼすことが示唆された。特に、近所づき

あいが全くないグループは、幸福感の平均値が３を割っており、高齢者福祉としても地域保健としても、こうした層に焦点を当てていかなければならない。

Ｃの（３）で述べたように、高齢者に対する行政施策の展開の中で極めて重要な位置を占める「自治会等の呼びかけ」（24.6%）や「区の広報」（23.4%）が相対的に低率にとどまっていることは、足立区における高齢者の社会参加に関する構造的な問題を示唆するものである。他の地域でも同じような結果が示される可能性も否定できないので、足立区特有の問題かどうかは今後の研究に委ねたい。

Ｃの（４）（ａ）で明らかにしたように、サンプル全体で幸福感に影響する要因を検討した。統計的に有意な変数については、次のＥで確認することとして、ここでは関連のなかった変数について言及する。基本属性要因としては、仕事の有無、未婚子同居の有無、社会参加に関する変数としては、町内会・自治会への参加が幸福感と無関係であった。他の先行研究では、仕事を持っている高齢者ほど幸福感が高いという知見が示されているケースもあるので、比較検討することが必要である。町内会・自治会への参加についても同様に、他の先行研究では、町内会・自治会に参加しているほど幸福感が高いという知見が示されているケースもあるので、比較検討することが必要である。

Ｃの（４）（ｂ）で示したように、男性サンプルに限定して上で、幸福感に影響する要因を明らかにした。統計的に有意な変数については、次のＥで確認することとして、ここでは関連のなかった変数について言及する。基本属性要因としては、仕事の有無、未婚子同居の有無、社会参加に関する変数としては、町内会・自治会への参加が幸福感と無関係であった。これは、サンプル全体の結果と同一である。他の先行研究では、仕事を持っている高齢者ほど幸福感が高いという知見が示されているケースもあるので、比較検討することが必要である。

Ｃの（４）（ｃ）で明らかにしたように、サンプルのうち女性サンプルに限定した上で、幸福感に影響する要因を検討した。統計的に有意な変数については、Ｅで確認することとして、ここでは関連のなかった変数について言及する。基本属性要因としては、年齢、仕事の有無、配偶者の有無、未婚子同居の有無、既婚子同居の有無の５要因が、社会参加に関する変数としては、町内会・自治会への参加、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度の４要因が幸福感と無関係であった。女性サンプルの場合、幸福感を規定する変数が極めて少なく３変数しかないという構造的な特徴を有する。特記すべきこととしては、配偶者の有無が幸福感に影響しないという事実である。すなわち、男性にとって妻がいることは幸福感を高める方向に働くものの、女性にとって夫がいることは幸福感の高低に影響しないということである。少子高齢化が進行する中、配偶者を喪失した後、老夫婦２人暮らしから一人暮らしに移行していく中で、配偶者のいることの幸福感に及ぼす効果が男女で違うという知見は一人暮らし高齢者の社会参加を考える上でも重要な知見である。

E．結論

分析の結果、結論として以下の６点を示すことができる。

（１）子どもとの同居は、子どもが既婚子の場合にのみ、高齢者の幸福感に大きな影響を及ぼし、具体的には、高齢者の幸福感を高める。他方、未婚子との同居の有無は高齢者の幸福感の高低に影響を及ぼさない。

（２）予め用意した34の社会参加活動のうち、本研究では、近所づきあい、地域の行事への参加、町内会・自治会の活動、社会奉仕（ボランティア活動）、シルバー人材センターなどの５つの活動を取り上げ、幸福感との関連を見た結果、いずれも統計的に有意な関連が示された。５つの社会参加活動のうち、特に近所づきあいは幸福感に強いインパクトを及ぼしている。

（３）予め設けた７つの社会参加活動のきっかけのうち、「個人の意志で」（44.4%）と「友人・仲間のすすめ」（43.0%）が上位を占める一方、行政政策上極めて重要な「区の広報」（24.6%）と「自治会等の呼びかけ」（23.4%）が低率にとどまっている。７つの具体的なきっかけのうち「友人のすすめ」と「区の広報を見て」の２つについては、性差が確認でき、女性の方が多いと言う結果が示された。

（４）全サンプルについて、幸福感を規定する要因を重回帰分析した結果、以下の１０の変数が統計的に有意な規定力を示すことが分かった。基本属性要因としては、性、年齢、健康度自己評価、配偶者の有無、同居既婚子の有無の５要因が、社会参加に関わる要因としては生きがいの有無、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無の５要因が幸福感に影響を及ぼすことが明らかとなった。具体的には、女性ほど、年齢が高いほど、健康なほど、配偶者がいるほど、既婚子と同居しているほど、生きがいがあるほど、ボランティア活動を熱心にやっているほど、近所づきあいを良くするほど、友人をよく訪問するほど、趣味を持っているほど、幸福感が高いことが分かった。

（５）男性サンプルについて、幸福感を規定する要因を重回帰分析した結果、以下の１０の変数が統計的に有意な規定力を示すことが分かった。基本属性要因としては、性、年齢、健康度自己評価、配偶者の有無、同居既婚子の有無の５要因が、社会参加に関わる要因としては生きがいの有無、ボランティア活動の程度、近所づきあいの程度、友人訪問の程度、趣味の有無の５要因が幸福感に影響を及ぼすことが明らかとなった。この結果は、サンプル全体の場合と全く同一である。

（６）女性サンプルについて、幸福感を規定する要因を重回帰分析した結果、以下の３変数が統計的に有意な規定力を示すことが分かった。基本属性要因としては、健康度自己評価のみが、社会参加に関わる要因としては生きがいの有無、趣味の有無の２要因のみが幸福感に影響を及ぼすことが明らかとなった。女性サンプルの結果を示す表１７と男性サンプルの表１６と比較すれば一目瞭然であるが、幸福感に影響を及ぼす変数のありかたは全く非相称的である。

女性サンプルでは、配偶者の有無や同居子の有無といった家族関係や、町内会・自治会、ボランティア活動、近所づきあい、友人訪問といった社会参加に関わる社会関係が全く幸福感の高低に影響しない。こうした違いを踏まえつつ、高齢者の社会参加のあり方を検討し、高齢者の社会参加に関する政策的システムを構築していくことが必要不可欠である。

表１　既婚子との同居の有無別　幸福感

問4-ウ 同居（既婚の子）と 問21幸福感（4,5→4）のクロス表

			問21幸福感（4,5→4）				合計
			幸せ	やや幸せ	他の人と同じ	（あまり）幸せでない	
問4-ウ 同居（既婚の子）	いる	度数	135	71	48	14	268
		問4-ウ 同居（既婚の子）の %	50.4%	26.5%	17.9%	5.2%	100.0%
	いない	度数	511	537	345	157	1550
		問4-ウ 同居（既婚の子）の %	33.0%	34.6%	22.3%	10.1%	100.0%
合計		度数	646	608	393	171	1818
		問4-ウ 同居（既婚の子）の %	35.5%	33.4%	21.6%	9.4%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率（両側）
Pearson のカイ2乗	31.864[a]	3	.000
尤度比	31.352	3	.000
線型と線型による連関	24.066	1	.000
有効なケースの数	1818		

a. 0 セル（.0%）は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 25.21 です。

表２－A

記述統計

問21幸福感（転置）

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間 下限	上限	最小値	最大値
いる	268	4.2127	.94190	.05754	4.0994	4.3260	1.00	5.00
いない	1550	3.8826	1.02664	.02608	3.8314	3.9337	1.00	5.00
合計	1818	3.9312	1.02108	.02395	3.8843	3.9782	1.00	5.00

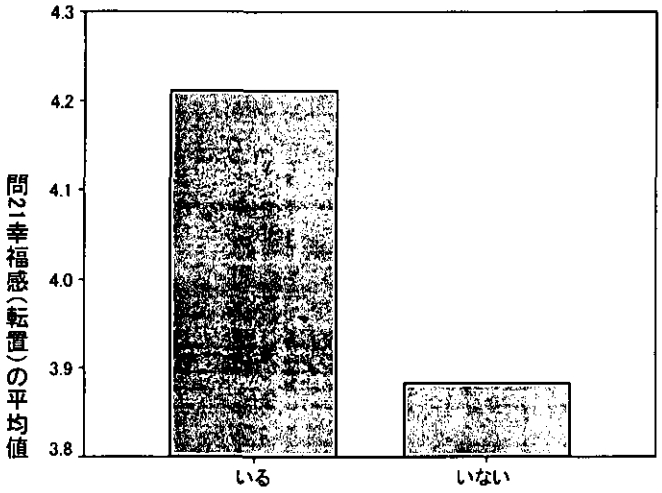
表２－B

分散分析

問21幸福感（転置）

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	24.899	1	24.899	24.186	.000
ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	1869.507	1816	1.029		
合計	1894.405	1817			

図１　既婚子との同居の有無別　幸福感



問4-ウ 同居（既婚の子）

表３　未婚子との同居の有無別　幸福感

問4-イ 同居（未婚の子）と 問21幸福感(4,5→4) のクロス表

			問21幸福感(4,5→4)				合計
			幸せ	やや幸せ	他の人と同じ	(あまり)幸せでない	
問4-イ 同居（未婚の子）	いる	度数	167	188	126	51	532
		問4-イ 同居（未婚の子）の %	31.4%	35.3%	23.7%	9.6%	100.0%
	いない	度数	478	420	268	121	1287
		問4-イ 同居（未婚の子）の %	37.1%	32.6%	20.8%	9.4%	100.0%
合計		度数	645	608	394	172	1819
		問4-イ 同居（未婚の子）の %	35.5%	33.4%	21.7%	9.5%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率（両側）
Pearson のカイ2乗	5.768[a]	3	.123
尤度比	5.820	3	.121
線型と線型による連関	3.204	1	.073
有効なケースの数	1819		

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 50.30 です。

表４－Ａ

記述統計

問21幸福感(転置)

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間 下限	上限	最小値	最大値
いる	532	3.8609	1.01931	.04419	3.7741	3.9477	1.00	5.00
いない	1287	3.9573	1.02179	.02848	3.9014	4.0131	1.00	5.00
合計	1819	3.9291	1.02173	.02396	3.8821	3.9761	1.00	5.00

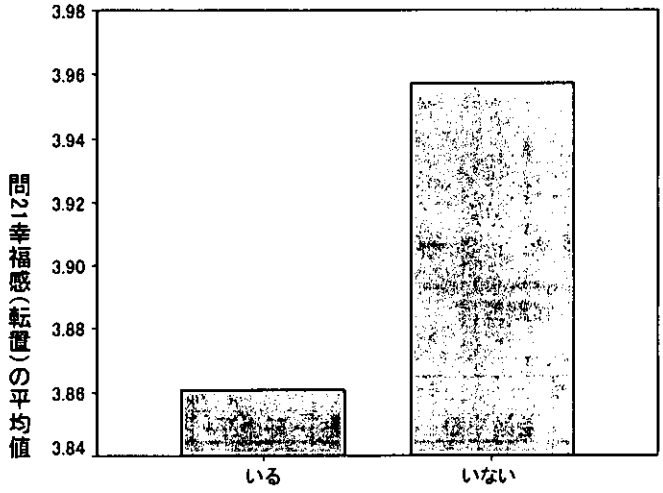
表４－Ｂ

分散分析

問21幸福感(転置)

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	3.495	1	3.495	3.352	.067
ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	1894.356	1817	1.043		
合計	1897.852	1818			

図２　未婚子との同居の有無別　幸福感



問4-イ 同居（未婚の子）

表５　近所づきあいの程度別　幸福感

問9-1 近所づきあい と 問21幸福感(4,5→4) のクロス表

			問21幸福感(4,5→4)				合計
			幸せ	やや幸せ	他の人と同じ	(あまり)幸せでない	
問9-1 近所づきあい	いつもしている	度数	352	204	133	37	726
		問9-1 近所づきあい	48.5%	28.1%	18.3%	5.1%	100.0%
	時々している	度数	229	297	146	57	729
		問9-1 近所づきあい	31.4%	40.7%	20.0%	7.8%	100.0%
	あまりしていない	度数	73	107	102	60	342
		問9-1 近所づきあい	21.3%	31.3%	29.8%	17.5%	100.0%
	まったくしていな	度数	14	23	26	25	88
		問9-1 近所づきあい	15.9%	26.1%	29.5%	28.4%	100.0%
合計		度数	668	631	407	179	1885
		問9-1 近所づきあい	35.4%	33.5%	21.6%	9.5%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	177.686[a]	9	.000
尤度比	165.226	9	.000
線型と線型による連関	138.771	1	.000
有効なケースの数	1885		

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 8.36 です。

表６－Ａ

記述統計

問21幸福感(転置)

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
いつもしている	726	4.1887	.94478	.03506	4.1199	4.2575	1.00	5.00
時々している	729	3.9465	.93828	.03475	3.8783	4.0147	1.00	5.00
あまりしていない	342	3.5234	1.09292	.05910	3.4071	3.6396	1.00	5.00
まったくしていな	88	3.1591	1.25841	.13415	2.8925	3.4257	1.00	5.00
合計	1885	3.9263	1.02794	.02368	3.8798	3.9727	1.00	5.00

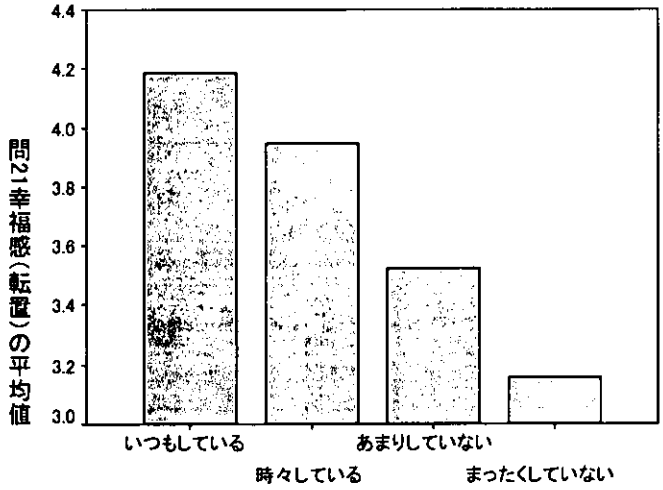
表６－B

分散分析

問21幸福感(転置)

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	157.604	3	52.535	53.906	.000
ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	1833.147	1881	.975		
合計	1990.750	1884			

図３　近所づきあいの程度別　幸福感



問9-1 近所づきあい

表７　地域の行事への参加別　幸福感

問9-13 地域の行事の参加 と 問21幸福感(4,5→4) のｸﾛｽ表

			問21幸福感(4,5→4)				合計
			幸せ	やや幸せ	他の人と同じ	(あまり)幸せでない	
問9-13 地域の行事の参加	いつもしている	度数	166	73	53	15	307
		問9-13 地域の行事の参加 の	54.1%	23.8%	17.3%	4.9%	100.0%
	時々している	度数	199	167	85	24	475
		問9-13 地域の行事の参加 の	41.9%	35.2%	17.9%	5.1%	100.0%
	あまりしていない	度数	190	220	115	40	565
		問9-13 地域の行事の参加 の	33.6%	38.9%	20.4%	7.1%	100.0%
	まったくしていない	度数	115	172	155	100	542
		問9-13 地域の行事の参加 の	21.2%	31.7%	28.6%	18.5%	100.0%
合計		度数	670	632	408	179	1889
		問9-13 地域の行事の参加 の	35.5%	33.5%	21.6%	9.5%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	166.127[a]	9	.000
尤度比	160.646	9	.000
線型と線型による連関	126.332	1	.000
有効なケースの数	1889		

a. 0 セル(.0%)は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 29.09 です。

表８－Ａ

記述統計

問21幸福感(転置)

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
いつもしている	307	4.2606	.94481	.05392	4.1545	4.3667	1.00	5.00
時々している	475	4.1347	.89699	.04116	4.0539	4.2156	1.00	5.00
あまりしていない	565	3.9752	.95060	.03999	3.8967	4.0538	1.00	5.00
まったくしていな	542	3.5074	1.11573	.04792	3.4132	3.6015	1.00	5.00
合計	1889	3.9275	1.02642	.02362	3.8812	3.9738	1.00	5.00

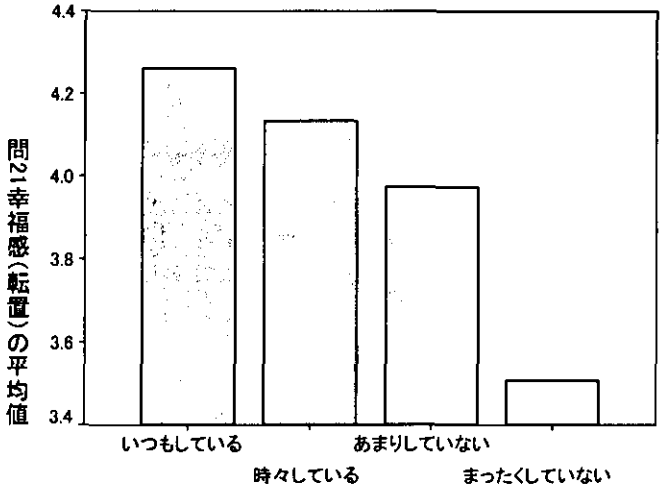
表８－Ｂ

分散分析

問21幸福感(転置)

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	151.411	3	50.470	51.771	.000
ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	1837.654	1885	.975		
合計	1989.064	1888			

図４　地域の行事への参加別　幸福感



問9-13 地域の行事の参加

表９　町内会・自治会の活動の程度別　幸福感

問9-14 町内会や自治会の活動 と 問21幸福感(4,5→4) のクロス表

			問21幸福感(4,5→4)				合計
			幸せ	やや幸せ	他の人と同じ	(あまり)幸せでない	
問9-14 町内会や自治会の活動	いつもしている	度数	175	90	58	12	335
		問9-14 町内会や治会の活動 の %	52.2%	26.9%	17.3%	3.6%	100.0%
	時々している	度数	190	185	108	34	517
		問9-14 町内会や治会の活動 の %	36.8%	35.8%	20.9%	6.6%	100.0%
	あまりしていない	度数	158	194	115	52	519
		問9-14 町内会や治会の活動 の %	30.4%	37.4%	22.2%	10.0%	100.0%
	まったくしていない	度数	145	163	125	82	515
		問9-14 町内会や治会の活動 の %	28.2%	31.7%	24.3%	15.9%	100.0%
合計		度数	668	632	406	180	1886
		問9-14 町内会や治会の活動 の %	35.4%	33.5%	21.5%	9.5%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	90.459[a]	9	.000
尤度比	88.961	9	.000
線型と線型による連関	70.944	1	.000
有効なケースの数	1886		

a. 0 セル(.0%)は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 31.97 です。

表１０－Ａ

記述統計

問21幸福感(転置)

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
いつもしている	335	4.2687	.90213	.04929	4.1717	4.3656	1.00	5.00
時々している	517	4.0193	.93780	.04124	3.9383	4.1004	1.00	5.00
あまりしていない	519	3.8632	1.00317	.04403	3.7767	3.9497	1.00	5.00
まったくしていな	515	3.6718	1.13961	.05022	3.5732	3.7705	1.00	5.00
合計	1886	3.9258	1.02840	.02368	3.8793	3.9722	1.00	5.00

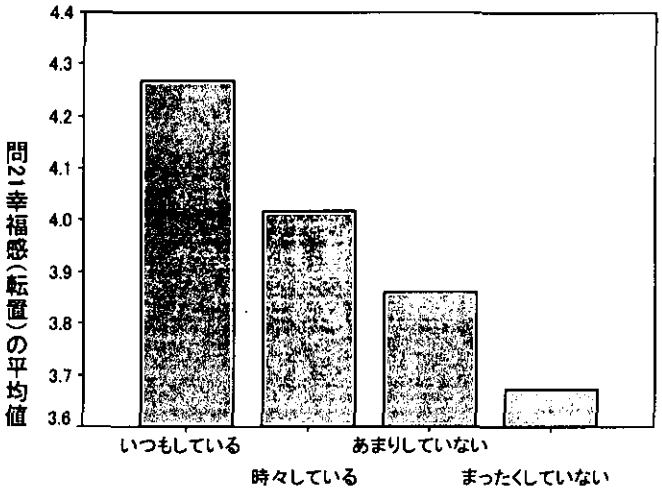
表１０－Ｂ

分散分析

問21幸福感(転置)

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	79.151	3	26.384	25.936	.000
ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	1914.456	1882	1.017		
合計	1993.608	1885			

図５　町内会・自治会の活動別　幸福感



問9-14 町内会や自治会の活動

表１１　社会奉仕活動（ボランティア活動）の程度別　幸福感

問9-18 社会奉仕 と 問21幸福感(4,5→4) のクロス表

			問21幸福感(4,5→4)				合計
			幸せ	やや幸せ	他の人と同じ	(あまり)幸せでない	
問9-18 社会奉仕	いつもしている	度数	82	45	29	4	160
		問9-18 社会奉仕 (	51.3%	28.1%	18.1%	2.5%	100.0%
	時々している	度数	177	131	67	23	398
		問9-18 社会奉仕 (	44.5%	32.9%	16.8%	5.8%	100.0%
	あまりしていない	度数	168	162	98	26	454
		問9-18 社会奉仕 (	37.0%	35.7%	21.6%	5.7%	100.0%
	まったくしていな	度数	241	294	214	127	876
		問9-18 社会奉仕 (	27.5%	33.6%	24.4%	14.5%	100.0%
合計		度数	668	632	408	180	1888
		問9-18 社会奉仕 (	35.4%	33.5%	21.6%	9.5%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	90.478[a]	9	.000
尤度比	92.473	9	.000
線型と線型による連関	76.980	1	.000
有効なケースの数	1888		

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 15.25 です。